

[資 料]

青年期における対人欲求および同調行動に関する研究

田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹

A Study of Interpersonal Motivations and Conformity Behavior in Adolescence

Yuna TAJIMA, Hirofumi YAMAZAKI and Daiju IWATAKI

The rate of young people leaving their jobs has increased in recent years. One reason given for this is their failure to develop interpersonal relationships in the workplace. We think educators must cultivate young people's communication skills and the ability to work in teams. This paper examines modern youths' interpersonal motivations and conforming behaviors. We conducted questionnaire research with 148 university students to obtain basic psychological data that we hope will enable us to support them in constructing smooth interpersonal relations. The analyses showed that interpersonal motivations had an influence on conforming behavior. One of the interpersonal relationship styles, conforming to others overtly, has led to difficulties in and dilution of reliable relationships. These characteristics may negatively affect interpersonal relationships in the workplace. Understanding the importance of interpersonal relationships and achieving self-understanding might help young people to develop healthier interpersonal relationships. In addition, we hope that these results will be helpful to those working to support young people in choosing and establishing careers.

Key words: interpersonal relationships (対人関係), interpersonal motivations (対人欲求), conformity behavior (同調行動)

I 問題と目的

厚生労働省(2014)は、平成25年1年間の離職率について15.6%と発表している。これは、平成24年と比べると、0.8ポイント上昇しており、年々増加していると言える。新規大学卒業者の離職率に着目してみると、卒業後3年以内の離職率は31.0%、1年以内の離職率は12.5%となっており、3年以内に離職する者のうち1年以内に離職する者が多いと報告されている(厚生労働省, 2013)。離職理由としては、労働政策研究・研修機構(2007)によると、仕事上のストレスが多い、給与に不満に加えて

職場の人間関係がづらいが挙げられている。このことから、最近では、就職したにもかかわらず、現実の職務の過酷さばかりではなく、職場や対職務上の人間関係により、離職してしまうリアリティショックの問題が浮き彫りになりつつある(斉藤, 2011)。

経済産業省(2014)は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「社会人基礎力」を2006年から提唱している。その一つに、多様な人々とともに、目標に向けて協力する力として「チームで働く力」が挙げられる。また、経済産業省(2010)の調査によると、「身につけておいてほしい能力水準」に企業と学生

で大きな意識の差があると報告されており、「粘り強さ」「チームワーク力」「主体性」「コミュニケーション力」について、学生は十分できているとの認識に対し、企業はまだまだ足りないと感じている。したがって、これらの基礎力が不十分のまま就職した者が、職場の人間関係を理由に離職する新規学卒者に繋がっていると推察する。そこで、厚生労働省(2004)は、企業が採用にあたって重視し、基礎的なものとして比較的短期間の訓練により向上可能な能力である「就職基礎能力」を提唱しており、その中の一つに、「コミュニケーション能力」を挙げている。したがって、就職するまでの時間で、「意思疎通」「協調性」「自己表現力」から構成されるコミュニケーション能力を養成することが求められる。

コミュニケーション能力を必要とする人間関係は職場だけに限るものではなく、我々は様々なコミュニティで対人関係を構築している。現代青年に特有の対人関係場面における特質として「ふれ合い恐怖的心性」の存在が指摘されている(岡田, 1993)。これは、対人関係が深まるような場면을回避する傾向があるとともに、身近な集団に受容されることに強迫的な努力と気遣いを行う面があることや、他者から暗いとか面白くない人間だと評価され仲間はずれにされることを極度に恐れるため、実際以上に明るく振舞い、深刻な話題を避けるといった傾向があるとされる。我々は社会において、対人関係を円滑に進めていくために、他者を気遣ったり、他者に合わせたりするなどの気持ちや行動をとることがある。このような気持ちや行動の背景には、純粋に他者を思いやる気持ちからの行動であるとも考えられる一方で、どう思われているか気になり、良く思われたい、悪く思われたくないという欲求からの行動とも考えられる(上山・米澤, 2006)。

渡部(1999)は、我々の対人態度の背景には、「他者から賞賛されたい欲求」「他者から拒否されたくない欲求」「他者との関係を回避する欲求」という3つの異なる対人欲求を想定する必要があると述べている。そして、これらの対人欲求と社会的スキルや認知された対人的コンピテンスの関係を検討した結果、社会的スキルや対人的コンピテンスが高いと

認知している人は他者から賞賛されたい欲求が強く、逆に社会的スキルや対人的コンピテンスが低いと認知している人は他者との関係を回避する欲求が強く、他者から拒否されたくない欲求をもつ人はその中間に位置すると述べている。よって、他者から賞賛されたい欲求の強い人は、対人場面で自己顕示的に行動することによって、自己の存在を集団の中に確保しようとすると考えられる。また、他者との関係を回避する欲求の強い人は他の2つの欲求の強い人に比べて社会的スキルが最も低く、また対人的コンピテンスも低いと認知しているために、対人関係を回避することによって自己防衛をするのに対し、他者から拒否されたくない欲求の強い人は、対人関係を維持しようとする欲求をもち、実際に対人関係を維持することが可能であると考えられる(渡部, 1999)。

さらに、岡田(1995)は、現代の青年の人間関係は、希薄化し、自分の本音を表に出さず、意見を周囲に合わせるような同調行動を取りやすくなっていることを指摘している。この同調行動とは、「自分とは異なる意見・態度・行動を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義されている(藤原, 2006)。同調には、内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」と、表面的には同調しているように見えるが内面では異なっている「表面的同調」がある。互いに傷つけ合わないような気を遣う自己防衛的で表面的な友人関係を構築する傾向が指摘されている現代の大学生においては、関係維持のために自分の意見や価値観などの自己表出を抑制する表面的同調行動をとることが考えられる(五十嵐ら, 2014)。これまでの研究において、同調行動は、田崎(1971)の集団内での葛藤を回避することで内的緊張の低減がみられるとの報告や、戸川(1956)の集団への適応を促進するといったポジティブな側面の報告が主であった。しかし、同調することにより、内心の自己意見と、集団意見に同調して呈示した自己意見との間に葛藤が生じ、ストレスfulな状態を招くというネガティブな側面も報告されている(坂本, 1999)。葛西・松本(2010)は、同調行動についてポジティブな側面が強調されると、社会の規範

に従うことが強調されることとなり、過剰に同調行動をしてしまう青年が存在すると示唆している。そのため、自己の意見を適切に表現できない青年や、自己の意見がない青年が存在し、それ故、人間関係の希薄化に繋がっていると考えられる。

そこで、本研究では、青年期における大学生の対人欲求と同調行動の関連を検討し、対人特性を把握することで、円滑な人間関係の構築のための心理的援助を行う上での基礎資料とすることを目的とする。

II 方 法

1. 調査対象者

東京都内の大学生 148 名から有効回答を得た。性別の内訳は、男性 59 名、女性 82 名、未記入 7 名。平均年齢は 20.05 ($SD=1.52$) 歳。

2. 調査時期・手続き

2013 年 9 月から 10 月、講義後に個別自記入形式の質問紙調査を実施。回答実施前に、対象学生に対して、本研究が個人の得点を問題にするものではないことや、プライバシーが侵害されることはないことを教示し、倫理面に配慮した。

3. 質問紙内容

(1) フェイスシート（性別・年齢）

(2) 対人欲求尺度

渡部（1999）が作成した対人欲求尺度を使用した。「賞賛」「非拒否」「回避」の 3 因子 26 項目で構成されている。回答は、「まったくあてはまらない」「あてはまらない」「どちらともいえない」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

(3) 同調行動尺度

葛西・松本（2010）が作成した同調行動尺度を大学生向けに語句を変更して使用することとした（例：改変前「友人に、自分を守ってくれるよう頼むことが多い」：改変後「友人に、自分の味方になってくれるよう頼むことが多い」）。表現の改変の際は、臨床心理士 3 名で検討した。「仲間への同調」「自己犠牲・追従」

の 2 因子 21 項目で構成されている。回答は、「まったくあてはまらない」「あてはまらない」「どちらともいえない」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

III 結果と考察

1. 因子構造の確認と信頼性の検討

(1) 対人欲求尺度

26 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、先行研究と同様の 3 因子構造が得られた。それぞれの因子における α 係数に関しても、.74～.91 の値が得られたため、使用に十分と判断した。

(2) 同調行動尺度

葛西・松本（2010）の同調行動尺度の項目内容を一部改変して調査を行ったことから、再度、因子構造の確認を行った。21 項目に対して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、先行研究と同様の 2 因子構造が得られた。それぞれの因子における α 係数に関しても、.79～.82 の値が得られたため、使用に十分と判断した。

2. 対人欲求と同調行動の相関・因果関係

変数間の相関分析を実施した（Table 1）。対人欲求の「賞賛」は、同調行動の「仲間への同調」と正の相関を示した。また、対人欲求の「非拒否」「回避」は、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」と正の相関を示した。

この結果から、他者から賞賛されたい者は積極的に仲間と同調する行動をとることが多く、他者から拒否されたくない者および他者との関係を回避する者は自分を抑えて仲間と同調する行動をとることが多いと解釈できる。

次に、それぞれの対人欲求の得点を平均値 (M) で高群（以下 H 群）、低群（以下 L 群）に分類し、同調行動得点を比較した（Table 2）。「賞賛」において「仲間への同調」が、「非拒否」および「回避」において「仲間への同調」と「自己犠牲・追従」が、L 群より H 群が有意に高いことが示された。

Table. 1 対人欲求と同調行動の相関係数

	対人欲求			同調行動	
	賞賛	非拒否	回避	仲間への同調	自己犠牲・追従
賞賛	—	.30**	-.02	.40**	.02
非拒否		—	.30**	.49**	.53**
回避			—	.18**	.51**
仲間への同調				—	.31**
自己犠牲・追従					—

** $p < .01$ Table. 2 対人欲求 2 群による同調行動得点の t 検定結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	比較
	L 群 (n=71)		H 群 (n=77)			
仲間への同調	2.16	0.70	2.50	0.58	3.16 **	L < H
自己犠牲・追従	3.16	0.63	3.11	0.67	0.43	
	L 群 (n=75)		H 群 (n=73)			
仲間への同調	2.07	0.58	2.61	0.63	5.35 ***	L < H
自己犠牲・追従	2.84	0.57	3.43	0.59	6.1 ***	L < H
	L 群 (n=78)		H 群 (n=70)			
仲間への同調	2.20	0.60	2.49	0.69	2.71 **	L < H
自己犠牲・追従	2.89	0.64	3.40	0.56	5.04 ***	L < H

** $p < .01$ *** $p < .001$

この結果から、対人関係においてより他者から褒められたいと意識する者の方が、積極的に仲間と同じ行動をとりたいという意識が高いと解釈できる。さらに、対人関係においてより拒否されたくない思いが強い者や他者との関係を回避する者の方が、自己を犠牲にして、積極的に周囲に同調する傾向が高いと解釈できる。

さらに、相関分析結果において、変数間相関が認められたため、対人欲求の3つの下位尺度である「賞賛」「非拒否」「回避」が、同調行動の「仲間への同調」「自己犠牲・追従」の2つの下位尺度に影響を与えているモデルを検討するためにパス解析を行った。その結果、モデル適合度は $GFI=.997$, $AGFI=.960$, $RMSEA=.009$ となった。この結果を Figure 1 に示す。

「仲間への同調」に対しては、「賞賛」「非拒否」が正の有意なパスを示した。対人関係において他者

から褒められたい、他者から拒否されたくないと考ええる者は、積極的に仲間と同じ行動をとる傾向にあると示唆される。「自己犠牲・追従」に対しては、「非拒否」「回避」が正の有意なパス、「賞賛」が負の有意なパスを示した。したがって、対人関係において他者から拒否されたくない者や他者との関係を回避する者は、自己を犠牲にして周囲に同調する傾向にあると示唆される。また、他者から褒められたいという思いが強い者は自己を犠牲にしてまで友人に合わせる傾向が低いことが考えられる。

以上の結果から、対人欲求と同調行動には関連があることが示された。そこで、「他者から賞賛されたい欲求をもつ者」「他者から拒否されたくない欲求をもつ者」「他者との関係を回避する欲求をもつ者」の3つに分類されている対人欲求それぞれについて考察する。

まず、対人関係において他者から褒められたいと

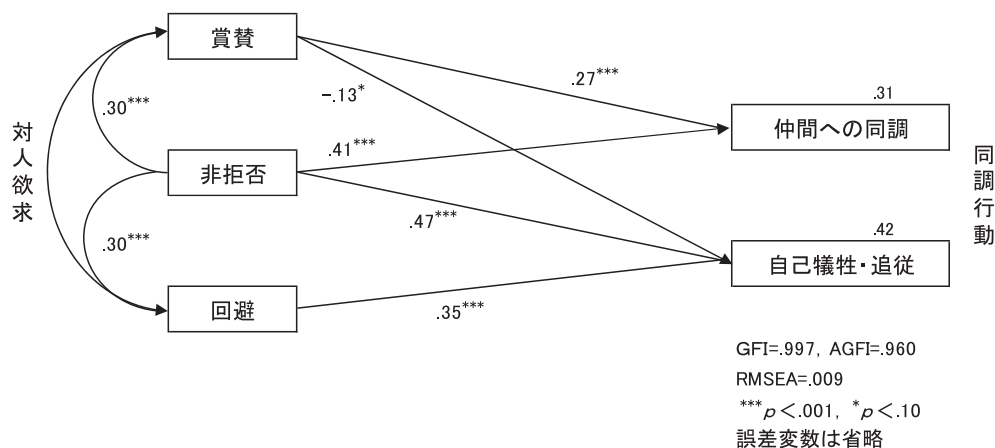


Figure. 1 対人欲求, 同調行動の因果関係

考える者は、積極的に仲間と同じ行動をとる一方で、自己を犠牲にする傾向は低いことが示唆される。これは渡部（1999）の報告と同様に、他者から褒められたい者は対人場面で自己顕示的に同調行動することによって、自己の存在を集団の中に確保しようとするためと考えられる。ただし、自己存在価値を見出すためや、セルフエスティームや対人関係を維持するために他者から賞賛を得ようとする者については過剰な同調行動となっている可能性も否めないだろう。しかし、本研究での、積極的に仲間と同調するが、自己を犠牲にしてまで同調する傾向は低いとの結果から、彼らは自己存在価値やセルフエスティームが比較的高く、それを維持しようとする傾向も併せ持っているのではないかと推察される。中谷ら（2006）は、セルフエスティームが高い人ほど対人コミュニケーション能力が高いとの報告していることから、彼らは比較的健康的な対人関係を構築することが可能であると考えられる。

次に、他者から拒否されたくない考える者は、自分を抑え、積極的に仲間と同じ行動をとる傾向があると示された。彼らは、五十嵐ら（2014）が示す、気を遣う自己防衛的で表面的な友人関係を構築する傾向である「表面的同調行動」を積極的にとる者にあたると考えられる。また、五十嵐ら（2014）は現代の大学生において表面的同調行動をとる者が多いと述べていることから、この表面的同調行動をとる者の多くが新規学卒者の離職率に繋がっているのではないかと考えられる。彼らは、自分を抑えてで

も対人関係を維持していこうとする意識が高いため、特に新規場面での対人関係によるストレスは大きいものと推測される。これらのストレスを抱えたまま現状を維持しようと努力するため、途中で限界を迎えるのではないだろうか。それとともに本来の自分を出し表すことができないことから、職場内での深い人間関係の関わりを構築することも困難であり、息抜きをする場所、人間関係ともに確保できずに離職への道を辿ってしまう可能性が示唆される。

最後に、他者との関係を回避する傾向が強い者は、自己を犠牲にして仲間と同じ行動をとる傾向があることが示された。渡部（1999）は、他の2つの欲求の強い者に比べて社会的スキルや対人的能力も低いと認知しているため、対人関係を回避することによって自分を防衛すると述べている。さらに、滝上・米澤（2006）は、対人関係を避けたい人は対人関係においてネガティブな態度をとると述べている。このことから、自分の特徴に見合った回避という行動をとることで自己防衛するという自己を理解した上での行動は、自らの精神的健康を保持するには最も望ましい行動であるが、社会的には望ましい行動とは言い難いだろう。本研究の結果から、彼らの意識には、関係をなるべく回避したいが、関係をもつ際は自己を抑え同調するという行動様式となると推測できる。したがって、社会において、避けることのできない対人関係において、関係を構築するための最低限の術は持ち合わせていると言えるのではないだろうか。また、自己の特徴を理解していることか

ら、職業選択の際にも自分に見合った選択をすることができれば、離職へ繋がることは避けられると考えられる。

以上のことから、他者から拒否されたくないが故に表面的同調行動をとる者や対人関係そのものを回避する者などの特徴をもった対人態度の背景により、信頼・信用できる人間関係を構築することが難しくなっていることが考えられる。周囲に同調することで平穏な人間関係を維持できると捉えていても、それは希薄化した関係に留まり、心と心の繋がりには届かない関係となっていることもあると推察される。就職後は、これまでの学生生活と全く異なり、ストレスを抱えることが多い環境、様々な価値観をもつ人々の中で、自身がこれまで築いてきた対人関係の様式が表面化し、リアリティショックに陥る可能性がある。その際に、個々の対人態度のパターンや、行動様式を把握することで、自己理解に繋がり、対人関係構築の際のヒントとなることもあると推察される。また、これらを事前に把握していれば、職業・進路選択の段階で、自己にあった選択をすることも可能となるであろう。

経済産業省（2010）や厚生労働省（2004）において就業以前に身につけておくことが求められている力を、学生の時期に様々な資源を用いて取り入れることが人間力を高め、ひいては新規学卒者の離職率低下の糸口になるのではないかと考える。そこで学内でのキャリア支援講座や学生相談室において、アサーションやストレスコントロール力を身につけ、集団の中での他者との関わり方のヒントを得られるようなグループワークプログラムなどを取り入れていくことが有効であると考ええる。大学でのキャリア支援において、卒業するまでに先述したコミュニケーション能力を身につけられるようなキャリアサポートや、学生相談室の活用が望まれる。

【謝 辞】

本研究執筆にあたり、調査にご協力いただきました株式会社ゴルフ・ドゥの佐藤瑞起さんに深く御礼申し上げます。

＜引用文献＞

- ・藤原正光（2006）「同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み（1）—大学生による小5時代の回想から—」『文教大学教育学部紀要』40, pp. 1-9
- ・五十嵐透子・野村珠紀・岩崎眞和（2014）「大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連」『上越教育大学研究紀要』33, pp. 107-114
- ・葛西真記子・松本麻里（2010）「青年期の友人関係における同調行動—同調行動尺度の作成—」『鳴門教育大学研究紀要』25, pp. 189-203
- ・経済産業省（2010）「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査」http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/shakaijin_kan.pdf 2014. 11. 25
- ・経済産業省（2014）「社会人基礎力育成の好事例の普及に関する調査」<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> 2014. 11. 25
- ・厚生労働省（2004）「『若年者の就職能力に関する実態調査』結果」<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/dl/h0129-3a.pdf> 2014. 11. 25
- ・厚生労働省（2013）「新規学卒者の離職状況」http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/roudou_report/dl/20131029_03.pdf 2014. 11. 25
- ・厚生労働省（2014）「平成 25 年雇用動向調査結果の概況」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/doukou/14-2/index.html> 2014. 11. 25
- ・中谷有花・井上毅・宮田仁（2006）「セルフエスティームと対人コミュニケーション能力及び対人欲求との関連について」『日本教育情報学会年会論文集』22, pp. 282-283
- ・岡田努（1993）「現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係」『発達心理学研究』4, pp. 162-170
- ・岡田努（1995）「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』43, pp. 354-363
- ・労働政策研究・研修機構（2007）「若年者の離職理由と職場定着に関する調査」『JILPT 調査シリーズ』36, pp. 40-42, 122-125
- ・斉藤浩一（2011）「進学高校生のコンピテンシー成熟のためのストレス認知構造モデルの構築」『東京情報大学研究論集』14, pp. 16-28

- 坂本剛（1999）「中学生の学級集団における同調行動と適応についての一研究」『名古屋大学教育学部紀要』 **46**, pp. 205-216
- 滝上真衣子・米澤好史（2006）「対人態度，対人欲求，対人ストレスの関係—新しいネクラ観の提案—」『和歌山大学教育学部紀要』 **56**, pp. 9-18
- 田崎敏昭（1971）「標準への同調・非同調行動と課題想起に関する実験的研究」『教育・社会心理学研究』 **10**, pp. 73-78
- 戸川行男（1956）『適応と欲求』 金子書房
- 上山喜寛・米澤好史（2006）「他者による自己評価意識尺度作成の試み—対人欲求・対人ストレスとの関係—」『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』 **16**, pp. 135-144
- 渡部玲二郎（1999）「対人関係能力と対人欲求の関係」『心理学研究』 **70**, pp. 154-159

（たじま ゆうな 心理学科）

（やまざき ひろふみ 心理学科）

（いわたき だいじゅ 群馬大学教育学部附属学校
教育臨床総合センター）